教科等研究会（小・中学校特別支援教育部会）
平成３０年度　研究活動のまとめ

１　研究テーマ

子どもの姿から出発する「分かる・できる」「楽しい」授業づくり
～一人ひとりの教育的ニーズに応じた授業づくりの工夫～

２　研究経過

	期　日	場　所	授業者、内容等
第１回	５／２４(半日)	甲佐小	研究テーマ決定、年間計画、組織作り （参加者７９名）
第２回	８／９（全日）	分教室 わいわいなかま 甲佐小	松橋西支援学校上益城分教室（甲佐町）施設見学 上益城療育センター「わいわいなかま」(御船町)施設見学 講話「自立と社会参加をめざすために」 松橋東支援学校　今田浩一　教諭 班別交流会　（参加者６３名）
第３回	１１／８(半日)	蘇陽小	池上寿詔　教諭　音楽「さんぽを歌と手話で表現しよう！」 班別交流会　（参加者５２名）
第４回	１／２４(半日)	御船小 御船中	廣田拓也　教諭 自立活動「頭にメモ、メモ～目、耳、言葉」 （参加者５９名） 上妻賢亮　講師　松本郁子　教諭「立体を作ろう」（参加者２４名） 年間反省

３　研究の概要

(1) 研究の内容

①研究テーマについて

今年度、特別支援教育部会では、昨年度と同じく「子どもの姿から出発する『分かる・できる』『楽しい』授業づくり～一人ひとりの教育的ニーズに応じた授業づくりの工夫～」というテーマで研究を進めてきた。

特別支援教育の完全実施から１１年目を迎え､児童・生徒の教育的ニーズも多様化している。子どものありのままの姿から、教材を工夫し「分かる・できる」「楽しい」授業づくりをしていくことこそ特別支援教育の根幹である。また、学齢期の今、授業づくりを工夫し、一人ひとりの実態や教育的ニーズに応じた支援方法を模索していくことが児童・生徒の将来の自立へ向けての重要な第一歩となる。

そこで、平成３０年度においても、昨年度同様、全体研究テーマの一部を部会の研究テーマとし、サブテーマを「一人ひとりの教育的ニーズに応じた授業づくりの工夫」として、子どもたちの実態をどのように捉え、そこからどのように授業をつくり上げていくかということに視点を当てて研究を進めていくこととした。

今年度の部会員も総勢８６名。大所帯ではあるが、今年度から理事長を２名置くこととなり、会場を分けるなど会員の分散化を図ることができた。できるだけ会員のニーズに応えた研究会にするべく、地区理事や研究部を中心に研究会の充実・深化を図った。同時に、協議の時間を工夫するなどして、それぞれの授業実践等を紹介する機会を多く持つこととした。

②研究の実際

研究授業及び授業研究会を２回実施し、夏季休業中の１回については、全日研修として施設見学と講師を招聘しての研修を実施した。

ア　第２回　全日研修　施設訪問及び講師招聘による講話

今年度は、施設訪問と講話、班別交流会を計画し、全日研修を行った。午前は、２班に分かれて松橋西支援学校上益城分教室（甲佐町）と上益城療育センター「わいわいなかま」（御船町）を訪問した。就学前での取組と支援学校高等部での取組を見せていただくことで、支援の連続性や今、できる支援内容や方法について考えることができた。

また、午後は、今田浩一教諭（松橋東支援学校）より、今年度から始まった普通高校での特別支援教室について事例をもとに丁寧に話していただいた。講話の内容については事前に会員にアンケートを行い、会員の悩みやニーズに応じた話をお願いした。日頃じっくり学ぶことが難しい内容について詳しく聞くことができ大変有意義であった。また、会の最後に４名～６名の班に分かれて情報交換会を行った。各自研修の中身を自分が担任している児童・生徒と重ね合わせ２学期からの実践へとつなげることができた。

イ　第３回　研究授業及び授業研究会

蘇陽小学校　池上寿詔　教諭　音楽「さんぽを歌と手話で表現しよう！」

（概要については、「４　実践事例」にて紹介）

ウ　第４回　研究授業及び授業研究会

御船小　廣田拓也　教諭　　自立活動「頭にメモ、メモ～目、耳、言葉～」

御船中　上妻賢亮　講師・松本郁子　教諭　　数学「立体を作ろう」

今回、本部会では、初めて小学校、中学校それぞれに分かれて授業研究会を行った。御船小では自閉症・情緒障害学級の５名に対しての自立活動「頭にメモ、メモ～目、耳、言葉～」の実践を見せていただいた。それぞれ学年も実態も違う５名の児童への個別の指導目標を立て、一人ひとりにつけたい力を吟味したよく練られた授業であった。また、御船中では、知的障害学級において数学「立体をつくろう」の実践を見せていただいた。子どもたちもたくさんの参加者の前で一生懸命活動ができ、自信につながったと思う。「小学校の先生にも見て頂きたかった」との声が会員から挙がった。この研究会では、御船町を中心に計３回の事前研を行い司会や授業サポートなど町全体で授業を練り上げることができた。また、授業研究会では、授業の良かったところや改善点について小グループで話し合い、会員の日頃の悩みも含めて効果的な手立てについて論議することができた。

(2) 成果と課題

○今年度、久しぶりに小学校２本、中学校１本、計３本のDVD視聴ではない生の授業研究会を実施することができた。子どもの反応をつぶさに見ることができ、児童・生徒の実態とニーズをもとに今つけたい力を考えた授業のあり方や支援方法について、詳細に学ぶことができた。

○町単位で授業研究会を受け持ち、司会、記録なども分担して授業者を支えるように組織化することで授業内容に深まりが見られ会員一人ひとりに力をつけることができた。

○４人～６人程度の少人数で具体的な実践例を出し合うことにより、様々な支援方法の可能性について話し合うことができた。班別編成も障がい種別や学年で分けたり、経験豊富な先生にリーダーをお願いしたりして互いに悩みを相談できる場としたことで､活発な話し合いができた。

○夏休みを利用した一日研修は、会員にも大変好評であった。長期休業中でなければできない施設見学や児童・生徒の将来に関わる就労や福祉について学べたことは有意義であった。来年度もぜひ、施設見学をしたいとの声が多数あった。ただ、今年度は山都町の研修会と日程が重なってしまい、参加ができない先生もおられた。日程調整が難しいが、早めに日時を決定・連絡するなどしてできるだけ多くの先生に参加できるよう工夫していきたい。

○今年度も、支援学校から研究会に参加いただいた。理事長からも特別支援学校の研究発表会や研修会などについても知らせて参加を促した。今後もさらなる連携を模索したい。

○８０名を超える大所帯の研究会のため、開催場所の選定、駐車場の確保等が難しかった。しかし、今年度は、部会長と理事長を二人ずつ置くことで分散開催が可能となり、施設訪問や研究授業が実施しやすかった。小中連携という意味では一緒に開催することも大事だが、来年度も会によって分散開催を行っていきたいと考える。

４　実践事例

(1) 授業の概要

蘇陽小学校知的障害学級での音楽の実践。９月に転入してきた５年生児童を中心に５年生４名３年生１名、計５名の児童への取組であった。参観者が多いため、体育館での授業となった。

《授業の視点》

児童がより主体的に学習に取り組んでいくために、これまでの体験活動を思いだし、自然と関わった故郷蘇陽の自然との体験の記憶を呼び起こしていく。また、自分の声や体を使って、仲間と協力して、手話の手法を活用して表現することで、音楽への興味・関心を高める。

《授業者自評》

・児童の普段の様子、人間関係について。今日は、意見が通らないから、「いいです。」ということではなく、子どもたちがこだわって話し合っていたのがよかった。
・最後の次時につなげるところで、子どもたちが多く意見を出していた。
・体育館といういつもと違うところでの授業だったが、子どもたちは、とても頑張っていた。
・５年生の交流学級の子どもたちが応援にきてくれて励みになったと思う。
・本校の特別支援学級のあり方、そして交流学級との関係などいろいろな所を見て頂けたのはありがたかった。いろいろなご意見をいただければと思う。

《協議より》

・場所も違う、人も多い体育館の中で堂々と授業を受けている子どもたちが素晴らしい。感想も一人一人言うことができていて、普段の取組の成果だと思った。
・全体を通して、先生の温かい声かけが参考になった。子どもたちの表情がとても良くて、明るく感じられた。交流学級との関係もうまくいっているので、子どもたちがいい表情をしているし、積極的に意見が言えるのではないかと思う。
・久しぶりに生の授業を見せていただいてありがたかった。
・子どもたちに事前に実際の場所に行かせて体験活動をさせてから、音楽の授業につなげていかれたのは良かった。
・音楽の授業というよりも、自立活動や生活単元学習の授業として扱ってもよかった。
・話し合いのとき、子どもたちがたくさん意見を言っていて、歌いながら動作するのが良かった。ただ、話し合いの時間が長かったので、途中で最初からやってみようと動きを入れてもよかったのではないか。
・動きの回数については、数をホワイトボードなどに描いて視覚的に提示してもよかった。
・手話は教科書を離れて、自由にされていいと思う。
・写真をもっと活用したらよかったのではないか。
・左右の確認が難しかったので、確認できるようにシールを貼ったり、円ではなく一列に並んで足踏みの確認など、場の設定の工夫があるとよかった。

《まとめ　松橋東支援学校　甲斐先生》

今回の授業では、音楽として扱うのであれば、音楽のよさを活かし、音楽をより親しみやすくしたり、受け入れやすいテンポにしたりしてもいいかと思った。手話というよりも身体表現という形の方が子どもたちにはマッチしていたと思う。身振りをどうしたらよいか、子どもたちから速さだったり、音の大きさだったり動きの部分でもたくさん意見が出てきた。そういったところを引き出していくと音楽活動になっていくと思う。

今後の可能性として、この曲を聴いて身体表現やそれぞれの表現のよさへの気付きを発表したり、それをお互い認め合うようにすると先生方が大事に思っていることにつながるだろう。この気付きや考える場面が自己理解、他者理解につながり、どうしたら自分はうまくいくのか、自己決定にもつながっていく。考える場面が大事なのだと改めて考えさせて頂いた。

《まとめ　乙女小学校　松田校長》

池上先生は本当に明るくて、体育館いっぱいに声が響く元気がいい授業を見せていただいた。会員にも参考になったと思う。特別支援の授業を行う上で大切なことは、子どもの視点に立つということ。それから、子どもの思考に寄り添っていくということである。子どもの反応に柔軟に対応していくことが大切である。今日の授業では、子どもたちが主体になるように、リーダーを立てながら様々な支援や手立てがあった。たくさんの参観者の中で、子どもたちは集中して一生懸命最後まで授業を受けていた。子どもたちがしっかりと活動する様子を見ることができて本当によかった。研究協議でもたくさんの意見が出た。意見をたくさん出し合い、交流し合うことで研究テーマに近づくものになったと思う。

(2) 学習指導案

音楽「さんぽ」を歌と手話で表現しよう

～仲間と協力してコミュニケーションをとろう～

池上寿詔　教諭（蘇陽小学校）

①　単元について

本単元「さんぽ」は音楽科の教材であり、学年を越えて、お互いに協力し手話を交えて歌うことができるコミュニケーション能力を高めるために適した教材である。

２学期も２か月が過ぎ、そよかぜ学級の５人の児童も、大きな学校行事である「そよっ子フェスタ」での発表を控えている。みんな音楽が大好きで、身体を使った表現も得意なのだが、周りの仲間と協調して、歌ったり、表現することや、相手とコミュニケーションを取ることが苦手であるといった課題も見えてきた。

また、本学級在籍の子どもたちにとって実際にその場所に行ってみたり、やってみたりといった生きた体験学習はとても大切なことである。繰り返しその場その場で体験を積み重ねることで子どもたちは、生きる力を体得していく。日頃はそれぞれの交流学級での学習が多い子どもたちだが、異学年の友達と協力し助け合って活動することは、子どもの活動の場を広げ、日常では難しいダイナミックでより児童一人ひとりに応じた学習や活動を構築することにつながる。

音楽科教材「さんぽ」を活用し、児童自身が、自ら考え、計画的、かつ自主的・意欲的に楽しく、見通しを持った表現活動ができるように考えて本単元を設定した。

本単元で学習する主な内容は、以下の通りである。

・曲想やリズムを意識しながら、進んで歌ったり表現したりすることができる。
・音楽に合わせて楽しく身体を動かすことを通して、情緒の安定や解放を図る。
・歌や手話を楽しみながら、仲間とコミュニケーションをとって表現することができる。

②　単元の目標

・手話の表現の仕方をみんなで話し合い、共通の動作を確認することで見通しを持ち、表現発表への意欲と期待を持つことができる。
・合同で練習を行うことで、思い合いや、意欲的に児童同士の交流ができる。
・表現方法を相手を意識して楽しみながらできる。

③　本時の学習

ア　本時の展開

本時の学習（３／４）

(1) 目標
歌に表情豊かな手話を加え、自分の思いを心から表現できるようにする。
手話に関心をもち、自然を表現することでふるさとを大切に思う心情を育てる。

(2) 展開

過程	時間	学習活動 ○主な発問・指示	学習活動 ◇予想される児童の反応	・教師の支援及び指導上の留意点	備考
導入	5分	1挨拶をしましょう。 2今月の歌「蘇陽風のふるさと」を歌いましょう。姿勢、口の開け方を意識しましょう。	◇元気に挨拶をする。 ◇大きな声で「蘇陽風のふるさと」を歌う。	・友達と一緒に楽しく歌い、学習意欲を高めるような声掛けをする。	CD
		「さんぽ」をみんなで協力して、手話を交えて歌おう。			
		3本日のめあてを確認します。		・本時のめあてを指示する。	
展開	35分	4「さんぽ」を手話をつけて歌いましょう。	◇みんなの声と伴奏をよく聞いて歌おう。 ◇この前、褒められたように、楽しく・元気に歌おう。 ◇手話を入れると歌うのが難しいな。 ◇手話を入れた方が、なんか楽しい感じがする。	・肩の力を抜き、口の奥を大きく開き、のびのびとした発声で歌わせる。 ・緊張しないで、練習の成果を十分出せるように前時のよかった点などをほめて、なごやかな雰囲気をつくる。 ・上手な表現を見つけ、認めてほめる。 ・楽しい手話になるように注意させる。	CD
		5（探検したスライドを見て）これまでに、蘇陽の自然を探した時に、感じた楽しかったことを、「さんぽ」に合わせて、みんなで工夫して手話で表現します。話し合いを始めます。	◇「トンネル」はこんな感じ。「一本橋」はこんな感じなどなど。 ◇大きく表現するようにしよう。 ◇声だけでなく視線や表現を豊かにしよう。 ◇心かつ表現しよう。 ◇ドキドキする。	・これまでの野外活動で、自然を探索した時の気持ちを思い出させ、それぞれの思いを出し合いながら、協力して手話を練習できるよう支援する。 ・のびのびと表情豊かに表現できるように声掛けする。	PC プロジェクター
		【言語活動】（設定の意図） 手話で表現するため、主体的にどうすればいいかを、考え、相手に伝えることができる。		【思考・判断・表現】 ・手話がコミュニケーションを図る大切な手段であることが理解できたか。 ・進んで手話の練習に取り組めたか。	
		6リラックスして、歌を手話を入れて発表させる。	◇早く発表したい。 ◇みんながいるから大丈夫。うまくできる。		
まとめ	5分	7練習の成果を生かして表現できましたか。感想を発表してください。	◇がんばった。 ◇楽しかった。 ◇みんなで協力してできたのがよかった。	・児童の素晴らしかった点をとりあげ認める。	
		8おわりの挨拶をしましょう。	◇元気に挨拶する。		

評価			
りお	□達成できた	□ほぼ達成できた	□工夫・改善が必要
じょう	□達成できた	□ほぼ達成できた	□工夫・改善が必要
かずみ	□達成できた	□ほぼ達成できた	□工夫・改善が必要
しげる	□達成できた	□ほぼ達成できた	□工夫・改善が必要
ゆうじ	□達成できた	□ほぼ達成できた	□工夫・改善が必要